

# 退魔戰記

豐田有恒

立風書房

# 退魔戦記

豊田有恒

立風書房

退 魔 戦 記

¥ 420

---

1969年 7 月 10 日      初版発行    検印廃止

著            者      豊    田    有    恒

発 行 者      能 見 正 比 古

印            刷      壮光舎印刷株式会社

---

発 行 所      立    風    書    房

東京都品川区旗の台 6 の 29 の 10

電 話 東 京 (786) 6561 (代表)

振 替 東 京    7 4 4 9 3    〒 141

---

落丁乱丁本はお取替えいたします。    © A.TOYOTA 1969

## 目次

|                    |       |    |
|--------------------|-------|----|
| プロローグ              | ..... | 五  |
| 第一章 退魔船出現するの事      | ..... | 三  |
| 第二章 異人ども館へ参るの事     | ..... | 三  |
| 第三章 退魔船空飛ぶの事       | ..... | 五  |
| 第四章 蒙古の間者捕わるの事     | ..... | 四  |
| 第五章 異人、物語するの事      | ..... | 四  |
| 第六章 三島明神神威を示したもうの事 | ..... | 一〇 |
| 第七章 蒙古の都へ渡るの事      | ..... | 二四 |
| 第八章 謎の異人われらを救うの事   | ..... | 三元 |
| 第九章 愚僧、りえ女と睦みあうの事  | ..... | 一六 |
| 第十章 戦備ととのうの事       | ..... | 二〇 |

|       |           |     |
|-------|-----------|-----|
| 第十一章  | 弥三太逃亡するの事 | 二七  |
| 第十二章  | 蒙古退治に出陣の事 | 二七  |
| 第十三章  | 天空に戦うの事   | 二〇六 |
| 第十四章  | りえ女、消えるの事 | 三六  |
| 第十五章  | 弘安の役の事    | 二六  |
| エピソード |           | 二四  |

長編SF

退魔戰記

装幀・イラスト 岩淵慶造

## プロローグ

### へ退魔戦記へ

バスを降りたとたんに、ぼくは、その異様な言葉を想いだしてしまった。たぶん、なにかの古文書の題なのだろう。どことなく不吉な感じのする題だった。

ここ一月ばかりのあいだ、ぼくは、このことばかり考えていた。いったい、へ退魔戦記とは何のことだろう？ それを確かめるため、ぼく自身が出向く必要があるのだろうか？ あれこれと迷いぬいたあげく、なけなしの有給休暇をさいて、とうとう、ぼくは、四国くんだりまで来てしまった。ぼくがバスを降りたのは、吉野川の北岸にある脇という田舎町で、これまで一度も来たことのない土地である。

そもそのことの起こりは、父が死んでから一月ばかりたったある日、父の書斎を片づけながら、ぼんやりと反古に目を通していたときのことだった。ぼくは、妙なものを読んでしまった。それは、几帳面だった父が、毎日かかさずつけていた日記だった。そのことが書いてある日付は、父が死ぬ一月ばかり前になっていた。結果的には、ぼくに對する遺言になったわけである。父の死因は、蜘蛛膜下出血だったから、それまでは健康体だった。つまり、そこに書かれていたことは、瀕死の病人の妄言というわけではないはずである。

八月二十日（土）曇

私は、いま迷っている。わが脇田家に伝わる〈退魔戦記〉を、長男の俊夫に伝えるべきか否か？ 俊夫が、二十五歳の誕生日に、四国の脇町へ行つて、最福寺の今泉住職から、あの古文書を見せられた時はたして、どのように感じるだろうか。たぶん、俊夫にも、私が経験したと同じように、一生にわたる重荷を課することになろう。これまで、脇田家の長男が二十五歳を迎えると、かならず〈退魔戦記〉を読ませる家憲になっていた。こんな愚かしいことは、私一代かぎりで終止符を打つべきかも知れぬ。俊夫にとつても、そのほうが幸せであらう。あの途方もない古文書のため、どれほど私は思い悩んだことか。俊夫は、〈退魔戦記〉のことを知らずに、自由に生きていくべきだ。私は、あの古文書に書かれたことが真実かどうかをつきとめるため、ありとあらゆる手だてをつくした。セルロイドのようなつややかな紙質のことも調べてみた。H・G・ウェルズの科学小説にでてくる時間機械のことも知った。だが、なにもかも徒勞でしかなかった。

父の日記は、それだけだった。翌日の項を読んでみても、もはや〈退魔戦記〉のことには、一言も触れていなかった。

はじめのうち、ぼくには、何のことかさっぱり判らなかった。脇田俊夫は、ぼくの名前である。はっきりしているのは、そのことだけだった。

脇田家の長男は、二十五歳の誕生日を迎えると、この脇町の最福寺というところで、〈退魔戦記〉という古文書を見ることに、ずっと昔から決まっていたらしい。それにしても、家憲などという大時代な

言いまわしが使われているところを見ると、あまり結構な話ではないのだろう。

ぼくは、バス停をはなれて、ゆっくり歩きはじめた。ぼくの乗ってきたバスが、この町ただひとつの交通機関である。鉄道が通っているのは、吉野川の南岸のほうで、準急の停まる穴吹という駅がある。つまり、この脇町は、鉄道が通らなかつたため、時代から取りのこされてしまったのである。

江戸時代には、阿波蜂須賀氏十七万石の筆頭家老だった稲田氏二万石の城下町で、徳島県第二の都会だった。ぼくが行こうとしている最福寺というのは、この稲田氏の菩提寺だったという。

歩いていくうちに、ぼくは、なんとなく懐かしいような気持ちになった。一度も来たことがないのに、懐かしいというのも変な話だが、この町は父の生まれ故郷だから、ぼくにとってもまんざら関係のない場所ではない。父の田舎だというのに、一度もきたことがないのは、父が子どもたちを、この町に近づけまいとしていたからである。

だからといって、ぼくの父は、故郷で不始末をしでかしたというわけでもないらしい。年賀状などは出していたようだし、遠い親戚にあたるといふ人から、名物の素麺そうめんを送ってもらったこともある。

それに、父は、話だけによくきかせてくれた。少年時代に、吉野川でジャコジャコを釣ったことがあるという。ジャコジャコというのは、この地方の方言で、ヤマベのことである。また、父が子どものころは、草鞋わらじばききの一日がかりで、土柱どちゅうの景観を見にいったという。土柱どちゅうというのは、ここからそれほど遠くないところにある観光名所で、インディアンでもできそうな変わった地形である。

そんなわけで、この小さな町は、ぼくにとっても、心の故郷ふるさとみたいなものになっていた。一度も来たことがなくても、地図や写真などで、だいたいの見当はついているのだ。

ぼんやり歩いていくと、むこうから土地の人らしい中年男がやってきた。

「あの、最福寺へ行きたいんですが」

「最福寺っちゅうたら、もう住職なくなりましたぜえ。なんでも、お嬢さん一人か住んどらんがな。ほんで、そのお嬢さんも、東京へ往んでしもうたんでなあ、いま誰もおらん」

その男は、済まなさそうに答えた。まるで、最福寺の住職の死んだことが、自分の責任みたいな口調だった。

住職が死んだという。いったい、どうすればいいのだろうか？ 父の日記には、住職からへ退魔戦記〆を見せられる、としか書いてなかった。とにかく、ここまで来て、手ぶらで帰るわけにはいかない。ひとまず、最福寺まで行ってみるべきだろう。

「一応は行ってみることにします。場所を教えてください」

「これ、まっすぐ行くちゅうと中学んところへ出るけん、右へ上がって二本松んところが最福寺じゃけん」  
中年男は、道を教えながら、じろじろぼくを見つめる。定めし他所者らしく見えることだろう。ぼくは、無遠慮な視線を敬遠して、うやうやしく頭を下げてから歩きはじめた。

言われたとおりに行くと、まもなく、こんもり木の茂ったところへ出た。太い松の木の下に朽ちかけた山門があり、最福寺と書かれた扁額がかかっていた。

どうやら、目的地に辿りついたらしい。山門のあたりには、木の葉が積もって朽葉色の山ができてあがっている。荒寺になっているに違いない。かつて城主の菩提寺だったという由緒ある寺も、なくなった今泉住職を最後に、それっきり無人のまま放置されているのだろう。

境内を歩いていくと、本堂のまえに出た。屋根瓦が落ちて雨樋に引っかかっている。方丈の格子が折れ、開きかけた扉の蝶番が曲がっている。扉の片隅に、小さな野球帽が、ちょこんと置きさられている。きつと、この寺は、近所の子どものたのび場になっているのだろう。

あたりは、不気味なくらい静かだった。ここまでやってきたものの、やはりむだだったようだ。それでも、念のため、枯草を踏みわけて、方丈の裏手へまわってみた。

そこは、庫裡くらりになっている。どうせ、目ぼしいものは入っていないだろうが、〈退魔戦記〉なる古文書があるとすれば、ここだろうと思った。

日当たりがわるいので、礎石のあたりには苔が生えている。このあたりにあるものの全てが、死んだように沈黙している。

ぼくは、きゆうに、ほっとした気分になった。なんとなく、肩の重荷がおりたような気がした。

ここへやってきたのは、問題の〈退魔戦記〉を見せてもらうためだ。だが、住職が死んだ今となっては、それを手にいれる方法はなくなったわけだ。一生にわたる重荷をしょいこむことになる、と父が警告したところを見ると、ぼくにとって読まないほうが良かったのだろう。あの日記が禁じていたことを犯す、ぼくは、少なからぬスリルのようなものを感じながら、ここを訪れた。だが、その〈途方もない古文書〉を読む機会は、永遠に失われたことになる。それがはっきりしてみると、謎めいた日記の言葉に、子供じみた期待を抱いていたのが、むしろ恥ずかしいくらいだった。

ぼくは、庫裡くらりをあとにして、山門のほうへ戻りはじめた。女の声がぼくを呼びとめたのは、ちょうどその時だった。

「脇田俊夫さん……ですのね？」

振りむいたぼくの目に、庫裡の扉をあけて立つ女の姿が、だしぬけにとびこんできた。

ダスター・コートに身をつつんでいても、大柄なサイズが想像できる。日本人ばなれしたスタイルの若い女だった。二十二、三歳くらいだろう。顔だけを見た印象は、ボリュームのあるスタイルと、ちょっとアンバランスだった。瓜実顔の白い額には、つれ毛がはりと落ちかかって、その下に切れ長な一重瞼。黒目がちな左右の眼が、かなり離れている。まるで浮世絵から抜けだしたみたい、古風な顔立ちの美人だった。

「ええ、脇田ですが」

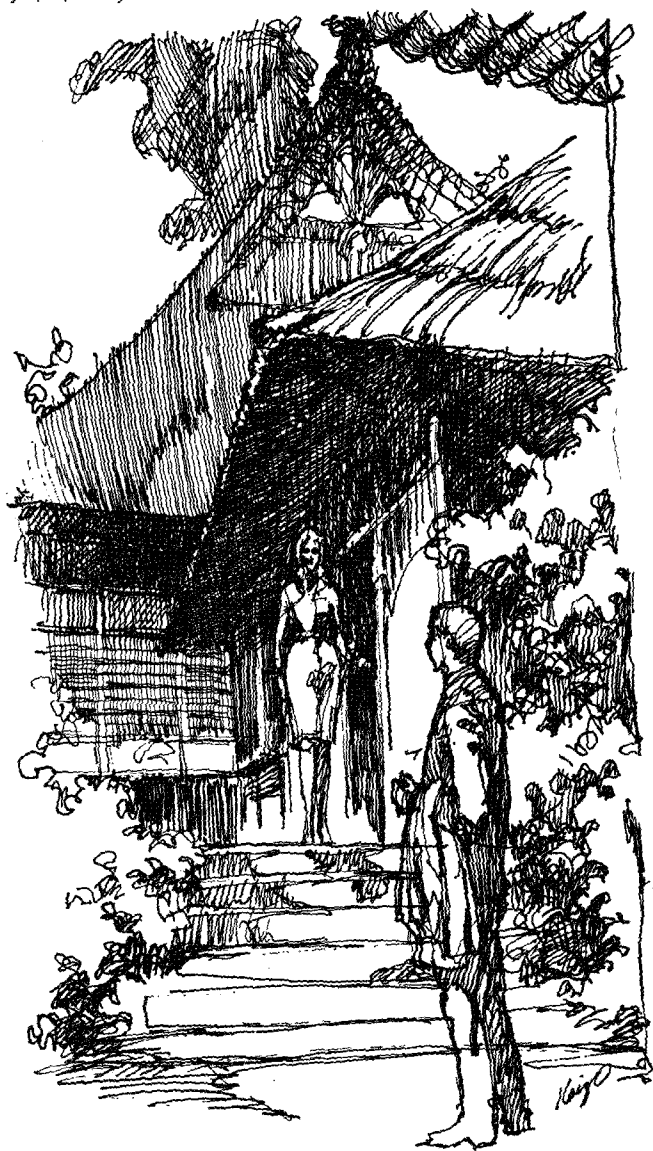
ぼくは、どぎまぎしながら答えた。荒寺の庫裡のなかから、こんな美人が出現したのだから、驚くのがあたりまえだろう。

「わたし、今泉小夜、この寺の娘ですの」

「すると、東京から戻ってきたんですか？ さっき、町の人から、お父様がなくなったという話を聞いたばかりです」

「父が、あなたのお父様と約束したからです。今日という日——つまり、あなたの二十五歳の誕生日に、ここへ戻っているように。これが、死んだ父の遺言でしたの。わたし、あなたは来ないと思っていましたわ。それに、わたしも、死んだ父の約束のために、ここへ戻っている必要はないと考えていました。今時、そんな昔の約束なんて……」

「でも、あなたは、ここに、こうして来ている」



「それは、父のためですわ。几帳面だった父の遺言どおりにしよう。そうすれば、たとえ、あなたが来なくても、わたしの気がすむと思って、父の墓参もかねて戻ってきたんです」

「申しおくれました。ぼくは、こういう者です」

ぼくは、ポケットを探って名刺をひっぱり出した。住職の娘——今泉小夜は、ぼくの名刺を眺めてから言った。

「菱井油化にお勤めですか？ 石油化学って、やり甲斐のある仕事なんですよ」

「ええ、好きで入社したんですから」

ぼくは、ひとめ見ただけで、彼女を気に入ってしまった。大柄のグラマー美人で、それでいて、いかにも古風な女らしさを感じさせる。ちょうど、ぼくの好みにぴったりだった。

それにしても、ぼくたちの堅くるしい会話は、あまりいただけない。ぼくたちは二人とも、それぞれの父親の遺言どおりに、ここへやってきた。そのせいだろうか、ぼくたちは、すっかりこまっちゃって、これから決闘でも始めるみたいになっていた。

「ぼくの父は、退魔戦記という古文書を、ぼくに読ませたくなかったようです。ところが、父が死んだため、遺された日記から、そのことが判ったわけです」

ぼくは、さっそく、問題の件にとりかかった。

「そうです。なんでも、その古文書は、ずっと昔から、この寺に伝わっているもので、脇田家の長男が二十五歳になると読ませることになっているそうですわ。あなたのお父さまも、二十五歳のとき、わたしの父から、退魔戦記を見せられたということですよ」

「もしかすると、埋藏金の隠し場所でも書いてあるかも知れませんね」

「どうかしら？ この近くの剣山というところは、平家の落人部落があったりして、埋藏金の噂もききますけど」

小夜は、そういつてから、初めて笑った。白い歯がこぼれるような小さな口唇が、えもいわれず可愛らしかった。

「それじゃ、さっそく、退魔戦記を見せてもらいましょう」

「ええ、庫裡のなかなんです。大きな長櫃ながびつがあるはずよ。そのなかに入ってます」

小夜は、庫裡のなかへ入っていく。そのあとにつづいて、ぼくも、かびくさい湿ったなかへ足を踏みこんだ。

住職の死後、町会の管理になっているという庫裡のなかには、値打ちのありそうなものは、なにひとつ残っていないかった。木魚の割れたのや、毛羽けはのなくなった払子はらこの柄えなど、古道具屋に売っても幾らにもなりそうもないガラクタが、雑然と散らばっているばかりだった。そのなかから長櫃を見つけるのは、わけもないことだった。引っぱりだして、入口のところで蓋ふたを開いてみると、虫くいだらけの反古せとばかり詰まっている。小夜は、そのなかへかがみこんで、五冊ばかりの文書を取り出した。古めかしい背綴せとじの古文書は、すこしも破れていない。どこといって、虫のくった跡もなかった。

「これが退魔戦記か」

ぼくは、古文書を手にとって、ふしぎな感動を覚えた。昔から伝わるものだということだから、もっと傷んでいるかと思っていたが、思ったより完全に保存されている。

いったい、このなかに、何が書いてあるのだろうか？ それを読むことによって、ぼくの身にどんなことが振りかかってくるのだろうか？

ぼくは、期待と不安のいりまじった複雑な気持で、じっと小夜を見つめていた。

ぼくと小夜は、退魔戦記を手にして、東京へ戻ってきた。休暇にも限りがあるし、ひとまずは目的の古文書を手にいれ、脇町にとどまる必要がなくなったからである。

そこに書かれていることを知るためには、どうしても小夜の助けがいりそうである。そこで、ぼくは、五冊にわかれた古文書を彼女に託し、再会を約束して別れた。どうせ持ちかえったところで、達筆な文字を読めるわけではない。ぼくは、ちょっと心あたりのことがあったので、余白になっていたページの紙を切りとってポケットに入れただけだった。

彼女は、高校で国語を教えているのだそうだ。

彼女の住まいは、ぼくの勤めている研究所と、それほど離れてはいない。だから、ときどき会って、読めたところまで、きかせてもらうこともできる。

ぼくのほうは、なにもしなかったかというところ、かならずしもそうではなく、そこに書いてある内容よりも、むしろ古文書の紙質について、とんでもない発見をしてしまった。

古めかしい背綴じ。達筆な表紙の文字。そこまでは、いかにも古文書にふさわしい体裁だった。ところが、それに使われている紙は、和紙ではなかった。すべてすべした手ざわりで、まったく繊維質を感じさせない。もし、普通の古文書に使われている手漉きの和紙なら、一定の方向に漉きあげられた鞣皮織